

なつごろも

右

まつ風

左の薫物の香いひしらぬ匂ひに侍る、とをくかほりすがりまでもなつかしく侍なり、右の薫物の香いにしへの侍従などやうにきこえ侍りにほひすがりまであしからず、まかりといへども、左のほひにはをよびがたかるべし、左なつごろもは、夏ごろも春にをくれてさく花のかをだにほへおなじかたみに、よろしくも名付られたりと、一同に申、上手のまはざと申侍る、右まつかせは、すみよしのさとのあたりに梅さけば松風かほる春の曙といふにて、なづけられたり、梅の歌にて薫物になを付たる、いにしへより類ひもおほく、事に侍る等類もあるべきと各申侍りしを、作者陳じ申されけるは、むめの花と申も、梅がかと申も、むめと申も、ふるきに侍れば、それをもともちひて、梅さけばまつかせかほると申を、つゞきよろしきかとおもひたまひて、名づけ侍るなりと申さる、其時各尤なり、ことのほかにおもしろし、さては名だにまぐべきにあらず、おなじまなるべし、薫物のか左まさりたるにより、一番の左勝なりとさだめられ侍りける、

名合せ

〔五月雨日記〕おりからさみだれのころは、なをいほのうちまめやかに、むぐらのたのもしげに門をとちたるも、かゝるすまゐには心になひたるなど、ひとりふたりあるわらはなどに、いひきかすれど、き、もいれず、○中略かゝるところに、あさちふみわけてくる人あり、いかなるにかとはせ侍れば、柳營○足利政義の御もとよりとて、ふみをさしいだす、ひらきみれば、いつく香あはせの事あるべし、香二種香た、みしてもていでよ、名をかくして例のとをり判もあるべし、あまりつれづれとふりくらしたるに、かゝることをもよほし侍るよしをいひて、うちしめり菖蒲ぞか